【エッセイ】

闇の中の狐
狐の民俗自然誌のために

小島瓔禮

一、野生との出会い

昨年の夏、二〇〇一年七月三十一日の朝六時すぎ、いま住んでいる神奈川県の丹沢山塊の東のはずれにあたる、愛甲郡愛川町半原の家の庭先で、野生の狐を見た。山に続く裏の細い道の草むらの中に立っている、正面向きの姿である。たかだか二十メートルほどしか離れていない。時計で計ったら一、二分のことであったろうか。私には二、三分、あるいは三、四分も向き合っていたように思えた。

ぴんと立った大きな耳が、印象的であった。顔は細面にはちがいないが、意外なほどふっくらとしている。のどもとから腹にかけての真白い毛が、なんとも愛らしい。まさに狐色の毛並が、つやつやとかがやく。少し上向きにじっとなにかを見ている眼は、澄んでいてやさしい。私は狐を目のあたりにしておどろいた。狐がこんなにかわいらしくて、親しみ深い獣であるとは思ってもみなかった。それまで私が思いこんでいた狐の姿とは、まったく違っている。

キタギツネの映像を見るたびに、なんと愛くるしい獣だろうかと思っていた。それにひきかえ、ホンドギツネの絵像が無気味に思えるのが不思議であった。しかしいまホンドギツネに出会って、私の心象はすっかり変わった。あら

ためて写真集*を出してみると、なんとかえってキタギツネの方が怪異的である。耳の先や眼のふちの黒い毛が、無気味さをただよわせている。

*竹田津実『キタキツネの詩』（一九七七年、サンリオ）など。

このあと十一月に、紀伊半島の山の中の生活に体験的にくわしい中瀬古きぬ恵さんから、熊野の山中で見た狐の印象を聞いた。自動車のヘッドライトに浮かびあがった狐の姿は、とってもかわいらしかったという。野生の狐に出会って親しみを感じるのは、私だけではないという例証を得て嬉しかった。狐を見てどう感じるかは、個人の問題である。しかし狐自体にも、人間にどんな印象を与えるか、それなりに属性が備わっているはずである。

民俗学には、自然と人間との接点から見なければならない領域が多い。そもそも民俗学の基盤になる「村」そのものが、自然との対応で成り立っている。自然を知ることによって、民俗学の因果律による解析も深化する。自然の知識は、もちろん専門家の研究成果に学ばなければならないが、それを身につけるためにも、自分自身の観察による演習が必要になる。村人の暮しとのかかわりでは、われわれの独自の発見が役に立つことが多い。

狐と人間との交渉の問題となれば、狐の生態を知ることがたいせつな手掛りである。私などは愚かにも、日本人の豊かな狐をめぐる信仰や言い伝えは、単純に、狐になにか神秘的な挙動があって生まれ、かつ信じられてきたのであろうぐらいに漠然と思ってきた。しかし自然のままの狐の素顔を知ってみると、それは狐にとってもう一つの顔にすぎない。あらためて私は、神秘的な狐の信仰も、あのあどけない、愛らしい現実の狐から生まれていることを認識した。

二、描かれた虚像

動物学者によると、狐は夜行性ではあるが、日没後や早朝によく行動するそうである*。繁殖期や子育て期には、昼に活動することもあるという**。そうすると、われわれの先祖が野生の狐を見る機会は、それほどとぼしくはなかったはずである。私が出会ったのも、朝早くであった。日が落ちたあとでは、どんどん暗くなる。夜が明けてすぐ、明かるくなってきたときが、人間が狐の姿を見る貴重な時

間帯であった。

＊増井光子『日本の動物　哺乳類』自然観察と生態シリーズ・一〇（一九七六年、小学館）五〇頁。

＊＊今泉吉典「キツネ」『日本大百科全書』第六巻（一九八五年、小学館）五九三頁。

日本人の狐観には、そうした狐との出会いの時の体験が、反映しているにちがいない。しかし現代では、狐を見たという人は思いのほか少い。自分の周囲の人に尋ねてみたが、七、八十歳の世代でも、狐を見たということさえ聞かないという人が多い。せいぜい一目見たという人が、たまにいるくらいである。私のように、狐とじっくり向き合ったという人はまずいない。自然の狐に出会うことは、めったにないことらしい。

専門家の書いた動物誌でも、自然の中の狐の姿を具体的に伝えた記述は、意外なほど少い＊。巣穴とか糞とか足跡とか、狐を見なくてもわかることが多くなる。民俗学にとっては、村人が経験して伝えてきた、耳で聞く観察記も貴重であるが、その種の記録でも、狐については神秘的な話題ばかりが目立つ＊＊。今日では自動シャッターで生態の写真を撮ることも可能であるが、その写真家も狐を映すことのむずかしさを語っている＊＊＊。

＊増井・前掲書、朝田稔『日本の哺乳動物』（一九七七年、玉川大学出版部）、今泉・前掲書など。

＊＊向山雅重『山村小記』（一九四一年「再版」一九四二年、山村書院）、松山義雄『山村動物記』（一九四三年、山岡書店）など。

＊＊＊田中光常『野生動物を追って』（一九七一年、小峰書店）。

一九四六年ごろ、学校への行き帰りに通る家で、生け捕りにした狐を庭先に飼っていたことがある。帰りに、友だちとすわりこんで、狐をじっくりと見ていたことも何度かあった。狐は鉄の杭に鎖でつながれていて、ただ歩きまわるか、すわっているかしていた覚えがある。子ども心に、野獣らしいしゃきっとしたところがないのは、自由がないせいであろうかなどと思ったものである。

ただこのときには、従来の自分の狐の心象と違っているとは思わなかった。いままで書物などで見知ってきた狐を、野生の狐で検証していることが誇らしかった。野生の本物の狐を見ているという感動があった。しかし今度、自然の中の狐に出会って、あのときの　がれた狐は、すでに自然

のままではなかったと痛切に感じる。凜としたやさしさとは異って、全体にぐったりとしていた。少くとも、生気みなぎる姿ではなかった。

私などは稲荷社の前に飾られている狐の像や、書物の絵や写真などで狐の姿を心に描いてきたが、この二度の生きている狐との出会いから、江戸時代以来われわれが狐として見てきた彫像や絵画は、自然の姿からはほど遠いものだったのではないかと疑いはじめている。一瞬目にとまった狐を描いたクロッキーもあるかもしれないが、ふつうにはモデルにすることが困難な狐であってみると、写生しようとすれば、当然飼っている狐か死んだ狐を写すことになる。

三、闇の中に生きる

狐といえば、日本の村では、もっとも身近に話題になる獣である。しかも人を化かすといって、怪異な獣の代表であった。おそらくそれは、人間と重なるかのように棲みながら、ほとんど白日の下には姿を現わさず、闇の中の存在であったからであろう。狐は不可視の世界にあって、つねに人間に存在感を与えていた。その闇の部分が、村人の非現実的な虚像の世界を支えてきたにちがいない。

数日前、半原で鉄砲ぶち（猟師）から聞いたという狐の話を教わった。狐はだますのがうまいという。狐は逃げるときに、道を真直に行き、途中から折り返して来て少しもどると、横道にそれてしまう。犬は狐のにおいを追って、どこまでもまっしぐらに進んで行くので、狐を捕ることができないそうである。きっと狐には、こんなずる賢い習性があるのであろう。

鉄砲ぶちは、闇の中の世界にいる狐を撃つのが仕事である。姿を見ないまま、狐と接触する機会をつくる。いわば狐の虚像の世界に生きている。この狐の知恵も、人間からいえば化かされていることになる。狐の神秘性の最初の体験者は、猟師であったにちがいない。狐を仕とめる、とらえる。狐の非野生の姿態を、具体的に提供するのも猟師である。日本人の狐をめぐる精神文化は、犬をつかう狩猟の時代に成り立っているといえそうである。

また最近、半原の五十歳代の人から、キツネッピ（狐火）の体験譚をいくつも聞いた。一つは、経ケ岳（きょうがたけ）という山の稜線に、火が点々とともっているのを見たという。また、月が出ている夜に、もう一つ、向山（むかいやま）から大きな月が

上って来るのを隠川（おんがわ）で見たという話もあるそうである。不思議なことに、月が二つになったという。さらに、その人が子どものころ、畑仕事の手伝いに行ったときの体験談である。夕方仕事を終わって、みんなで家路についた。途中まで来ると、二百メートルほど先の大きなモミソ（モミ）の木の茂みの中ほどに、炎が燃えあがっているのを見たという。

この人は狐火の存在を、かたく信じている。どのときも、一人で見たのではなく、何人もの人がいっしょに見ているから、その事実は確かであるという。モミソの木の怪火のときは、朝その木の下を通った人が、犬のような獣を見かけたというから、狐が化かしているにちがいない、どうやって狐は人を化かすのだろうか、と私に問いかける。現代でも、狐火を疑わないほどの体験者がいることが貴重である。

夜の怪火を狐のせいにする伝えは、めずらしくない。不思議なことは狐の仕業にするだけともおもえるが、そう考えること自体が、狐を怪異な獣とする観念そのものである。狐の存在が火によって象徴されるということは、狐が闇の中に生きていることのあかしである。光の部分と闇の部分との均り合いにより、現実の狐も非現実の狐も、その存在を示していた。

四、お穴さまの信仰

愛甲郡のすぐ北に続く津久井郡の川尻の人で、村の伝えにくわしい安西勝さんも、狐を見たことがあるという*。一九四八、九年のこと、陸稲（おかぼ）が色づくころであった。朝早く、八幡前の深っ堀を通りかかると、目の前に大きな犬が飛び出した。毛の色は白っぽく、首から尾まで平らにして、矢のようにというたとえそのままに、陸稲の畑を苦久保（にがくぼ）稲荷に向かって泳ぐように消えた。

＊安西勝「城山博物記鳥獣篇」『鉄筆雑志』第三号（一九六五年、私家版）七五頁、直話でも聞く。

あっというまの出来ごとであったが、どうも犬とは違う。背を少しも波うたせず、ふさふさと豊かな尾を煙のようになびかせていて、いかにも美しかった。村の人は、それが狐の特徴であるという。この苦久保稲荷の森には狐の穴があって、年経た狐が棲んでいるという伝えがあり、安西さんが見た狐は、その稲荷さまの使いの狐であるということ

になったそうである。霊狐の大和絵でも見ているような話である。

狐といえばお稲荷さま、お稲荷さまといえば狐というように、狐と稲荷の神とは一つの神格のようになっているが、もともとは狐の穴をまつる信仰が、稲荷の神に結びついたものらしい。本社の伏見の稲荷大社でも、狐の神をまつる白狐社には、うしろに狐の穴があるとされてきた。稲荷大社では、その発祥の地と伝える稲荷山の山頂には、オツカといって三つの塚がまつられているが、そこには白狐社の元宮にあたる命婦社をまつる命婦塚もあった＊。

＊大貫真浦編『稲荷神社志料』（一九〇四年、私家版）三七二―三、三九七―八。

東京の羽田空港の敷地にかかって話題になった穴森（あなもり）稲荷も、もともとは、遠浅の浜に茂った芦原の中にあった、狐の穴を拝む信仰に由来していた。湿地の芦の中に敷き並べた板の道をたどって、やっとお参りするような場所で、オアナサマと呼んでいたそうである。斎藤幸成父子三代の『江戸名所図会』（一八三四・六年刊）には、いまの上野公園にあった忍岡（しのぶがおか）稲荷を、世に穴の稲荷と呼ぶとある。これもオアナサマの信仰の一例であろう。

稲荷の神の狐の信仰が、伏見の大社以来、狐の穴をまつるかたちをとっていたことは重要である。闇に隠れているがゆえに神秘的であるかにみえる狐を、狐の穴という現実の光の部分で崇拝していたことになる。そうなれば、信仰は実像の世界にあった。安西勝さんの川尻の聞き書きには、狐が出産すると、穴の入口に重箱に入れた赤飯を供える風習があったという＊。狼についてもいうことではあるが、注意すべき習俗である。

＊安西・前掲書、七八頁。

私が学んだ県立厚木高校の敷地の一部分のようなところに、狐塚というちょっとした塚があった。狐の穴があるから狐塚と呼ぶのだと、先輩は伝えていた。相模川の平野に臨む台地の縁にあたっている。狐塚という小地名は、狐がいないという四国と佐渡を除いて、秋田県から九州のはてまで二百以上もあるというが＊、塚といい、狐の穴といい、伏見の大社の信仰と同じ形態である。明かるい原の中にある狐塚の風景を思うと、この狐の信仰も、あの愛くるしい野生の狐の現実の生活から生まれているとしか思えない。

＊柳田国男『月曜通信』（一九五四年、修道社）一〇六―七頁。

五、寒施行の季節

私にはもう一度、野生の狐との出会いがあった。五十数年前、一九五〇年ごろ、いまの家の屋敷に昔の草葺きの家があったときである。冬の寒い日の夜中であった。外で箱が動くような音がして、ギャッという異様な声を聞いた。とっさに、飼っている兎が狐に捕られたとおもった。キャオーン、キャオーンという声が遠ざかって行く。翌朝見ると、そのとおりであった。村の人にこのことを話すと、キャオーンとは狐の鳴き声であるという。

そのころ兎を狐にやられたという話が、そちこちにあった。春先のこんな夜、狐はよく里におりて来るものだとも聞いた。ちょうど同じ季節に、近畿地方から中国地方にかけて、寒施行（かんせぎょう）などと呼ぶ行事がある。寒の内に狐の穴の入り口に食物を供えたり、稲荷の社に参ったりする風習である。また一月十四日の夜や十五日の朝に、狐狩りといって、狐の害を防ぐなどという行事をおこなう村もあった*。

*井之口章次「狐施行のこと」『日本民俗学』第八八号（一九七三年、日本民俗学会）参照。

なにか寒の内から立春にかけての時期に、狐に注意を向けなければならない事情があったにちがいない。専門家によると、狐の発情期は一、二月である。春に子どもを生み、雄と雌は協力して子どもを育てる。夏の終わりには、子どもは独立するという*。寒施行や狐狩りは、ちょうど狐の恋の季節にあたっている。人間の関心が狐の巣穴に向かい、出産を期待するときであった。

*増田・前掲書、四七頁。

これらの行事の対象にも、稲荷の社のほかに、具体的な狐の穴が含まれていたことは意義深い。稲荷の信仰が先にあって白狐社のように狐の穴にこだわったのか、狐の信仰が先で稲荷の社もまつったのかは即断できないが、いずれにしても信仰の根底に狐の穴があった事実は、ゆるがせにできない。それは闇の世界の見えない狐ではなく、光の世界の見える狐と人間が接触する季節であった。

安西勝さんは、川尻で、鉄砲ぶちが子狐を捕って来て飼っているのを見たことがあるという。また狐の穴で子狐が遊んでいるのを見付けたが、なにもしないで帰って来たという鉄砲ぶちの話も聞いている*。身ごもった母狐のいる穴に食物を運ぶと、やがて子どもが名前をもらいに来る。

名を呼ぶと姿も見せずに来て、その人の問いに答えるようになるという伝えもある。巣穴をとおして、人間と狐はもっともっと親しくしていたにちがいない。それでこそ、狐の神秘も深まったはずである。

＊安西・前掲書。七五頁。

いまの石川県七尾市には、十二月になると狐が山の神に納める年貢をさがしに、鳴きながら村に出て来るという伝えがあった。猫の頭一つ、古むしろ二枚、油あげ三枚が年貢である。猫の頭とは奇異であるが、江戸時代以来、狐が猫に踊りを教えていたとか、猫が狐と交わって狐の子を生んだとか、狐を猫の怪異性の先輩とする話はいろいろある。狐は怪異な獣の地位を、猫に譲ってきているようである＊。現実の世界では、すでに家畜の猫の方が優位に立ち、狐は埋没しているのかもしれない。

＊拙著『猫の王』（一九九九年、小学館）一三六、一一八―二三頁。

六、景戒の延暦日記

薬師寺の僧景戒（きょうかい）の『日本霊異記』は、いわば日本最古の狐の民俗自然誌である。そこでも、きわめて現実的な姿の狐が、神秘的な霊異の主人公であった。まず巻下第三十八条、私が景戒の延暦日記と呼ぶ部分に、狐との出会いが見えている。一つは延暦十六年（七九七）四、五月のことである。景戒の部屋で毎夜狐が鳴き、また堂の壁を狐が掘って中に入り、仏の坐に糞をしてけがした。さらに昼に家に向かって狐が鳴いた。それから二百二十日余りたって、十二月十七日に景戒の息子が死んだという。

もう一つは、延暦十八年の十一、二月に、景戒の家で狐が鳴いた。翌十九年の一月十二日と二十五日に馬が死んだという。どちらも災いは前兆があって起こるという論理で、狐の行動を息子の死や馬の死の予兆としてとらえている。おそらくこの時代、狐が家に入ること、あるいは家で鳴くことを、不吉なことの前ぶれとする俗信があったのであろう。仏の坐をけがしたことも、景戒は信仰の否定と受けとめていたのかもしれない。

ここで興味深いのは、狐が人間にとってきわめて身近な獣であったことである。これらの時期は、ちょうど狐の活動期でもある。四、五月といえば、いまの暦の五月初めから七月初めで、狐の子育ての季節になる。十一、二月は、

狐が里に下るという、例の寒施行のときである。千二百年前から、狐と日本人の交渉史の自然律は、変わっていなかったことになる。

かつて『日本霊異記』を読みはじめたころ、狐の霊異を語りながら、そこに登場する狐がとても現実的であることを不思議に感じた。それは昼間にも現われる、私も見たあのかわいらしい狐の姿である。上巻第二条の狐を妻にして子どもをもうける狐女房の物語でも、飼い犬に正体を見破られて、妻が狐の姿を現わしたときの描写も「籬（まがき）の上に登りて居る」とあり、愛くるしい狐の姿をしのばせる。この狐が妻になった時季も、狐の繁殖期にあたっていた可能性もある。

下巻第二条では、死者の霊が狐になり、人に憑（つ）いて病気を起こすという、後世の狐憑きにも通じる霊異を記している。犬が病人に憑いている狐をくわえ出し、かみ殺したというが、その犬は、狐が憑いて取り殺した人の霊であったという。憑いた狐を犬が追い出すという現代の行法の類例になるが、上巻第二条で、犬が正体をあばく趣向とも同じ信仰で、これも現実の猟犬と狐の関係に還元できそうな物語である。

中巻第四十条には、子狐と巣穴が登場している。鷹狩りに行った人が、山で狐の子を見付け、串刺しにして穴の入り口に立てた。母狐はその人の子どもの祖母の姿になり、赤子を連れ出して串刺しにし、穴の入り口に立てたという。狐が人に化けて因果応報をはたす、霊威あふれる獣であることを語っているが、ここでも狐の穴という現実的な場所が舞台になっている。子狐に対する残虐な仕業の背景には、なにか古風な信仰があったにちがいない。もう一度、自然のままの現実の狐から、闇の中の狐を考えなおしてみたいものである。